



Title	芥川龍之介「偷盜」の中国における翻訳：排除された沙金の人物像
Author(s)	韓，淑花
Citation	待兼山論叢．文学篇．2026，59，p. 45-66
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/104561
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

芥川龍之介「儉盜」の中国における翻訳

——排除された沙金の人物像——

韓 淑 花

キーワード：芥川龍之介／「儉盜」／中国語訳／男性同士の連帯／女性の排除

一 はじめに

芥川龍之介にとって初めての長編小説である「儉盜」は1917年『中央公論』の4月号に「一～六」、また7月号に「続儉盜」として「七～九」の2回に分けて発表されている。発表当初から作者自身によって未完成作とみなされ、さらに、「中央公論はじまりしよりの駄作」（大正6・3・15付、松岡譲宛書簡）、「儉盜の續篇はね もつと波瀾重疊だよ」（大正6・4・26付、松岡譲宛書簡）などと、自らが失敗作と規定して、単行本に収録されることはなかった。また、従来の研究においては本作品が「羅生門」の発展的ヴァリエーション¹⁾として扱われるにとどまっている。周知のように1921年に魯迅が翻訳した「鼻」および「羅生門」を通じて、芥川は初めて中国の文壇に登場し、受容され始めた。しかしながら、「羅生門」と共通する主題や構造を有するとされる「儉盜」は、そうした初期受容の流れに組み込まれることなく、1990年代になってようやく初めて紹介され、その後、とりわけ近年において注目を集めつつある。本稿では、「儉盜」が中国においてどのように読まれてきたのかという点に焦点を当てたい。

二「偷盗」の位置づけ

本作には、それまでの芥川作品には見られないほど多数かつ多彩な人物像が登場する。物語の中心には、盗賊団の女首領である沙金が据えられており、彼女の魅力に囚われた兄・太郎と弟・次郎との愛憎に満ちた三角関係が物語全体を貫いている。かつては放免として働いていた兄弟は、盗賊となった沙金と出会ったことで兄弟は沙金のもとで盗賊団の一員として生きようになる。登場人物には、沙金の母である猪熊の婆、その夫であり沙金の養父である猪熊の爺、そして白痴に近い心を持ち身重の女盗賊阿濃などが含まれ、いずれも物語の暗く濃密な世界を形作る存在である。沙金は、美貌と邪悪さを併せ持つ魔性の女として描かれ、兄弟の双方と関係を持ちながら、密かに藤判官側に通じて太郎の殺害を企むが、襲撃は失敗する。混乱の中でお兄弟を操ろうとし、最終的にその兄弟の手によって殺される。物語の終盤、盗賊であった兄弟が再び丹後守の護衛として仕えているという噂が流れ、兄弟は再び権力の側に戻ったという皮肉な結末が語られる。

このような唐突な和解と沙金の殺害について、友田悦生（1997）²⁾ は「『偷盗』のモチーフを指摘する言語群は、すべて喪失から回復へという、ロマンが己に課した要請を、ことばを変えて表明し直したものにほかならない」と指摘し、特に沙金や阿濃が、こうした回復の物語から排除されている点に注目し、テキスト内の差別的なジェンダー構造に対する注意を促している。この視点を踏まえつつ、中村清治（1999）³⁾ は「こうした女性表象には、その背後に男たちの共同性—同性愛的連帯（ホモソーシャル）の問題が潜んでいることは確かと言う」と述べている。すなわち、本小説は「太郎と次郎が強固な男性性イデオロギーに、その意識の深層において支配されていることを物語っているものであり、そして、女を排除することが、男どうしの関係を維持するための必然性を持ちえていたという事実—それがいかに差別的と暴力に彩られたものであるか。」⁴⁾ に焦点を当てられている。このように、先行研究

においては、本作に描かれる沙金の「排除」が、男たちの関係性（ホモソーシャル）の維持に不可欠な構造として描かれていると指摘されてきた。

このような視点の萌芽はすでに、井汲清治（1917）⁵⁾ による「太郎、次郎は互いに愛し合ひながらも、愛の中に生ずる獣欲のために」「この獣欲を否定し、殺してしまわなければ救われない」という指摘に既にうかがえる。すなわち井汲は、男性同士の関係の内側に抑圧すべき欲望や葛藤が潜んでいることを早くも読み取り、それが後に指摘されるホモソーシャルな関係性の緊張や構造を先取りして示唆しているであろう。以後の研究においても、例えば、海老井英次（1974）⁶⁾、三好行雄（1984）⁷⁾ は、男同士の関係性を中心に据えつつ、対照的に女の存在を排除あるいは隠蔽するような物語構造に注目している。また、下坂恵（1986）⁸⁾ は、「芥川は、沙金以外の人間を、完全に、「畜生」の世界から救い出す」と述べ、沙金が救済や回復の物語から外され、人間的な存在意義が否定されていると考えられる。酒井（1992）⁹⁾ もまた、「〈兄弟〉を設定した龍之介は、沙金の専有をめぐる、〈兄弟〉が殺すか、殺されるか、という敵対・憎悪の極限に達するというストーリーによって、人間の〈畜生〉性を描き、そして、反転するストーリーとして、兄弟愛の復活というヒューマニティーの回復を描こうとしたのである」と物語の構造が暴力と所有を軸とした男性同士の対立にあることを読み取っている。奥野政元（1993）¹⁰⁾ はこの系譜を受け、「結局、兄弟愛の爆発という逆転が準備されていることが注目されるのである」と述べており、男性同士関係の回復が物語の主題であることを強調している。

さらに、平岡敏夫（1982）¹¹⁾ は、「『偷盜』の背後には、『二つの手紙』（大6・9）、『袈裟と盛遠』（大7・4）、『藪の中』（大11・1）といった他作品にうかがわれる、以降の芥川文学の重要なモチーフの発端のみならず、それらと密接にかかわる新たな女性認識・人間認識が蔵されていたのである。」と指摘し、芥川文学全体における「偷盜」の意義を論じている。とりわけこの「新たな女性認識」への着目は、本作における女性の排除構造を批判的に読み解こうとする本論の視点とも接続し得るものであり、重要な先行研究と

して位置づけられる。

このように、芥川龍之介「偷盗」は、その構造に内在する男性中心のジェンダー構造というテーマが着目され、それに伴う女性の排除という問題が批判的に論じられてきたのであり、同時に、そこに新たな女性表象への可能性を読み取ろうとする試みも行われてきたのである。

一方、中国における本作の研究は、日本文学を専攻する大学院生による論文が中心である。これら¹²⁾の研究の中、沙金について「他者」のような存在や、男性の女性不信という観点からの分析が多く見られるという指摘に対して、宋陽（2015）¹³⁾は、沙金の信じられない根本的な原因は－貞操の論争であると述べた。

中国における「偷盗」の研究は、日本における女性排除の議論を「他者」という形で継承しつつ、同時に「女性不信」や「貞操」といった倫理・道德の観点から沙金を捉えていると言えるだろう。

このような「偷盗」への評価をふまえ、本稿では、「羅生門」との関わりに注目するのではなく、上記の登場人物群を一つのまとまりとして捉えつつ、中国において「偷盗」がどのように読まれているかという側面を沙金の人物像に焦点を当て考察したい。

三 中国における「偷盗」の新たな翻訳の試み

「偷盗」の背後にある芥川的女性認識が描かれた関連作品、例えば「袈裟と盛遠」や「藪の中」などは、すでに1927年に夏丐尊訳・魯迅訳・方光蕘訳・章克標訳による『芥川龍之介集』¹⁴⁾（開明書店、1927）に所収されたが、「偷盗」は中国語に翻訳されたのは、1998年の黄来順訳「偷盗」（葉涓渠編『芥川龍之介作品集・小説集』中国世界語出版社）が初である。芥川作品は全集版が刊行された後にも新しい翻訳が続々と出版されていると述べたが、「偷盗」は2005年の全集版の前後には3本が確認されており、2020年以降に再訳が行われている¹⁵⁾。これらの翻訳の中、2024年に鄒波¹⁶⁾訳「偷盗」『羅生

門：故事新編』（広西師範大学出版社）が学術的研究を目的とした新たな訳として刊行され、従来とは全く異なる収録方法が採用されている。

2024年の鄒波訳『芥川文集』の一冊である『羅生門：故事新編』は、「研究型翻訳」¹⁷⁾を中心として編纂されたものであると以下のように明確に記される。

引用者訳：本文では、翻訳実践における二つの問題：「編纂」と「考証」の方法について検討する。具体的には、「研究型翻訳」を通じて、芥川文学に対する訳者の理解をどのように編纂に反映させ、作品に新たな視点をもたらすかを考察する。また、先行研究の成果を取り入れつつ、データベースや電子資料を活用して、筑摩書房および岩波書店新版全集の注釈における不足点を補い、いくつかの検証が必要な固有名詞を確認する¹⁸⁾。

訳者が述べる「編纂」と「考証」において目標にされるのは以下の通りである。

引用者訳：テーマを主線として関連作品を編纂し、全体的な読書体験の構築を目指す。次に、機械的で、受動的な翻訳を行うのではなく、「忠実に理解すること」と「忠実に表現すること」を目的として、翻訳の過程で繰り返し検証し、原文の情報と関連背景を深く理解する¹⁹⁾。

このように、鄒波訳「偷盜」は、文学作品としての芥川を深く読み解き、読者に新たな視点を与えることを意図した、学術的価値の高い試みである。本書のもう一つの特徴は、「序文」の部分に、宮坂覚と山本幸正が内容を寄せ、異なる角度から再び芥川作品を再解釈し、中国における新たな読みの可能性を示していることである。

宮坂は「芥川龍之介文学から村上春樹文学へ（代序）」（从芥川龙之介文学

到村上春樹文学（代序）と題した文章において、芥川文学が日本国内にとどまらず、国際的にも評価されてきた経緯を振り返り、その多層的な影響力を強調する。特に芥川作品が映画や他の文学との関係を通じて広がりを見せ、世界文学として受容されていることを示唆している。その一例として、村上春樹が英訳 *Rashomon and Seventeen Other Stories*²⁰⁾（ジェイ・ルービン訳、2006年）に序文を寄せたことが挙げられ、芥川作品が現代作家にも影響を与えていることが示されている。

一方、山本は「經典の来世生命のために」（為了經典的来世生命）と題し、芥川作品がいかに多様な形で保存・再評価され、読み継がれ、異なる文化圏にいて解釈されているかに注目する。氏は再び村上春樹の書いた序文を引用しつつ、芥川作品が単なる古典としての価値だけでなく、「するすると生き物のように流れていく」²¹⁾と形容される流動性を持ち、読む者の時代や背景にに応じて新たな解釈や意味を生み出し続けることを強調する。この点において、鄒波の翻訳もまた、中国語読者に的確に伝える工夫がなされているとして、高く評価されている。

このように、両者の序文は、いずれも鄒波訳「偷盜」における「研究型翻訳」という試みに学術的な裏付けと広い視野を与えるものであり、中国における芥川作品の新たな受容のかたちを示している。とりわけ、沙金という人物像を含む「偷盜」がどのように再構成され、読者に提示されているかは、翻訳を考えるうえで重要な視点を提供していると考えられる。

四「偷盜」における中国語訳—排除された沙金の人物像

プロットの展開に即すれば、太郎・次郎兄弟の行動様式によって「偷盜」は大きく二つの部分で成り立っていると考えられる。一つは兄弟が沙金をめぐって対立・葛藤する場面、もう一つは瀕死の次郎を太郎が救い、両者が和解した上で、最後に沙金を殺した場面である。

では、なぜ太郎と次郎が突如として和解し、沙金を殺害するに至ったの

か。中村（1999）は、「このようにいささか不自然に見える物語の進行も、実は「偷盜」の男たちの特質を浮き彫りにするために、重要な機能を果たしていたと言わねばならない。そこで何よりも注意したいのは、当の男たちにとって、男どうしの親密な連帯は、たとえ沙金を殺害してでも女に犯されてはならぬ、いわば男たちだけの聖域として、彼らの意識の深層を覆っていたという点である」²²⁾と明確に指摘している。この指摘に基づけば、兄弟関係の変容が物語の核心であり、それが沙金の排除という形で結実したと考えられる。

物語の序盤で、太郎は盗賊仲間の老婆と沙金の行動について語り合う中、沙金が弟・次郎と親しくしていることに嫉妬と不安を募らせていた。都の荒廃という時代背景と老婆との対話が太郎の内面を映し出す中、彼は次郎への信頼と、沙金の誘惑に弟が負けるのではないかという疑念との間で揺れ動く。太郎自身は、

己は、唯、次郎が、一子供の時から、己を慕ってくれたあの次郎が、己の心もちを察してくれて、よしや沙金のほうから手を出してもその誘惑に乗らない丈の、慎みを持つてくれる事と、一図に信じ切つてゐた²³⁾。

と「唯…一図に信じ切つてゐた」という表現を通して、太郎が「信じたいがゆえに信じようとする」一種の切実な願望を抱いていることが読み取れる。それは確固たる信頼というよりも、むしろ揺らぎを含んだ自己暗示的な信念の姿を浮かび上がらせている。ところが、2024年の鄒波訳を含んだ諸訳では、このようなく揺らぎ>が捨象されている。

鄒波訳（2024）：我总是相信次郎－那个大小时候起就仰慕我的次郎，能体察我的心情，就算沙金主动也能抵制住诱惑，慎之又慎。（引用者訳：私はいつも信じていた。次郎一幼いころから私を慕っていたあの次郎が、私の気持ちを理解し、たとえ沙金のほうから誘惑されても、それに

抵抗し、慎み深く振る舞ってくれる、と。)

王星星訳 (2023) : 我向来一心坚信, 次郎—那个自幼时起就依恋敬慕我的次郎, 察觉了我对沙金的心意后, 即便沙金主动示好, 他也会谨言慎行, 不受沙金的诱惑。(引用者訳: 私はずっと一途に信じていた。次郎—幼い頃から私に親しみ、敬慕してくれたあの次郎が、私の沙金に対する気持ちに気づいた後でも、たとえ沙金が言い寄ってきても、慎重に振る舞い、沙金の誘惑に負けることはない、と。)

丁朱蕾訳 (2023) : 我一直坚信, 次郎从小就崇拜自己, 知道自己的心思, 即使沙金主动勾引他, 他也会将其拒之门外。(引用者訳: 私はずっと堅く信じていた。次郎は小さいころから私を崇拝していて、私の気持ちを分かってくれており、たとえ沙金の方から彼を誘惑してきたとしても、彼はそれをきっぱりと拒絶する、と。)

鄭世鳳訳 (2022) : 自己只是一味地深信不疑, 希望次郎—孩提时代一直崇拜哥哥的那个次郎能够体察自己的心情, 即便沙金主动出击, 也要抵制住诱惑, 慎重行事。(引用者訳: 自分はただひたすらに深く信じているだけだった。次郎——子どもの頃から兄を崇拝してきたあの次郎が、自分の気持ちを察してくれることを。たとえ沙金が積極的に仕掛けてきたとしても、誘惑に抗い、慎重に行動してくれるよう、と。)

焼野訳 (2022) : 只是, 次郎小时候就一直很尊敬自己这个哥哥, 他绝对会考虑到哥哥的心情, 就算沙金先出手, 他也会谨慎处之, 不会被诱惑的, 自己一直都是这么想的。(引用者訳: ただ、次郎は子どもの頃からずっと自分という兄を尊敬してきた。だから必ず兄の気持ちを考慮してくれるはずだし、たとえ沙金が先に手を出してきたとしても、慎重に対処し、誘惑に流されることはない——自分はずっとそう信じていた。)

聶中華・曾文彤訳 (2007) : 我只不过太相信次郎, 相信他能理解俺的心情, 绝不会受沙金的诱惑, 他是一个非常谨慎小心的人。(引用者訳: 俺はただ次郎を信じすぎただけだ。彼なら俺の気持ちを理解してくれるし、決して沙金の誘惑に流されることはない。次郎はとても慎重で用

心深い人間なのだから。)

鄭民欽訳 (2005) : 自己只是坚信 : 次郎—这个小时候对白己崇拜的次郎能够体察哥哥的心情, 慎重行事, 即使沙金主动向 he 伸手, 也能拒绝对方的勾引。(引用者訳: 自分はただ固く信じていただけだった。次郎——幼い頃から兄である自分を崇拜してきたその次郎なら、兄の気持ちを察し、慎重に行動し、たとえ沙金が自分から手を差し伸べてきたとしても、その誘いを拒むことができるはずだ、と。)

方洪慶訳 (2003) : 我只是深信这一点 : 从孩提时代就一直羡慕着我的弟弟一定能体谅我的心情, 即使沙金是主动的, 他也不会理睬她的诱惑, 而会慎重的考虑。(引用者訳: 俺はただこの一点を深く信じていただけだ。子どもの頃からずっと俺に憧れてきた弟なら、きっと俺の気持ちを汲み取ってくれる。たとえ沙金のほうから積極的に迫ってきたとしても、その誘惑には取り合わず、慎重に考えて行動するはずだ、と。)

聶雙武訳 (1998) : 大小便那样崇拜我的次郎, 相信 他能理解俺的心情, 绝不会受沙金的诱惑, 他是一个非常谨慎小心的人。(引用者訳: 子どもの頃からあれほど俺を崇拜してきた次郎なら、俺の気持ちを理解してくれると信じていた。彼は決して沙金の誘惑に流されることはない。とても慎重で用心深い人間なのだから。)

黃来順訳 (1998) : 我只是深信 : 次郎—从孩子时代就一直在羡慕着我的这个次郎, 一定能体察我的心情, 即使沙金主动地向 he 伸出手来, 他也不会理睬她的诱惑, 而会非常谨慎的对待。(引用者訳: 私はただ深く信じていただけだ: 次郎—子どもの頃からずっと俺に憧れてきたその次郎なら、きっと俺の気持ちを察してくれる。たとえ沙金が自分から手を差し伸べてきたとしても、その誘惑には取り合わず、きわめて慎重に対処するはずだ、と。)

したがって、上記を見ると、鄒波訳に至るまでの諸訳では、「相信」(信じていた)「坚信」(堅く信じていた)「深信」(深く信じている)といった表現が

反復的に選択され、信念の主體的必死さよりも信頼の客觀的強度が前景化されている。その結果、太郎の内面にある不安や嫉妬、そしてそれを押し殺すための自己説得のニュアンスは後景に退き、次郎への信頼が理性的判断として再構成されてしまうように見られる。こうした訳語選択は、原文が描き出す、疑念を前提としつつ信じ切ろうとする心理の推移が翻訳上固定化し、物語序盤における太郎の不安定な心理状態—ひいては後の破綻を予兆する内的緊張—を弱めていると言えるだろう。

そして、太郎は「己は、敵には用捨しない。敵も己に用捨しないだろう。さうなれば、落ち着く所は、今から予めわかつてゐる。弟を殺すか、己が殺されるか」とまで思いつめているのに対し、次郎の方は沙金との関係を始終兄にすまないと思い、自分自身を責め、場合によっては兄の手により殺されても良いとまで思っている。

その上でならば、どんな死に様をするにしても、兄の手にかゝれば、本望だ²⁴⁾。

と次郎は語る。この発言が出る背景には、「が、自分が、どの位自分の不義を憎んでゐるか、どの位兄に同情してゐるか、それだけは、察してゐて貰いたい。」という懇願に見られるように、次郎の中にある兄に対する従属と承認への欲望が潜んでいる。しかし、その承認は恋愛的な競争に勝利するかたちではなく、「兄の手による死」という極端な様式において遂げられようとする。鄒訳は次郎の死を願ったことを、

如果是能那样，不管怎样的死法，死在哥哥手上我都心甘情愿。（引用者訳：もしそうできるのなら、どんな死に方であれ、兄さんの手で死ぬのなら私は心から甘んじる）

と訳している。原文における次郎の「兄の手にかゝれば」という表現が、

「死在哥哥手上」（兄さんの手で死ぬ）というより身体的で直接的な願望として訳出されており、次郎の内面的な執着や承認欲求がより鮮明に伝えられている点である。

一方、既存の訳文²⁵⁾を確認したところ、2007年の聶中華・曾文彤訳、1998年の聶双武訳のみでは、この箇所が改変されていると見られる。

聶中華・曾文彤訳（2007）：这样，无论如何死法，只要哥哥拉拉自己的手，也就了却了自己的心愿。（引用者訳：このように、どのような死に方であろうとも、兄が自分の手を引いてくれるだけで、自分の願いは果たされる。）

聶双武（1998）：这样，不论如何死法，只要哥哥拉拉自己的手，也就了却了自己的心愿。（引用者訳：このように、どのような死に方であろうとも、兄が自分の手を引いてくれるだけで、自分の願いは果たされる。）

両訳は、おそらく文章全体の内容を十分に考慮せず、単に個々の語句を翻訳することに重点を置いて、次郎の「兄の手にかゝれば」の前にすでに死の意志である「どんな死に様をするにしても」が表明されている点を見落としているのだろう。とりわけ、「拉拉手」（手を引く）という表現を採用したことで、次郎の「死の意志」に基づくものとしてではなく、兄によって「救い上げられたい」という願望が強調されるかたちとなっている。現代中国語において「拉拉手」（手を引く）は一般に手をつなぐといった身体的接触や導き・慰撫・援助のニュアンスを持つため、この訳は次郎の原初的な「死への志向」弱めてしまっているのである。

このように、鄒訳と既存訳を比較することで、兄弟関係を「対立の終着点」と捉えるか、それとも「救済の場」と見るかという解釈上の分岐が浮かび上がる。

このように、鄒波訳およびその他の訳者はいずれも同様の理解に基づいているのに対し、2007年の聶中華・曾文彤訳および1998年の聶双武訳の二訳

においてのみ、比較の結果、兄弟関係を「対立の終着点」と捉えるか、それとも「救済の場」と見るかという解釈上の分岐が浮かび上がる。

しかし、次郎の死の決意が完全に固まりきる前に、沙金が介入する。彼女は次郎に対して、太郎の殺害をそそのかす場面へ移行する。

「あなたの為なら、妾誰を殺してもいい」

この語の中には、蝎のやうに、人を刺すものがある。次郎は、再一種の戦慄を感じた。

「しかし、兄貴は一」

「妾は、親も捨てゝゐるのぢやない？」

かう云つて、沙金は、眼を落すと、急に張りつめた顔の表情が弛んで、焼砂の上へ、日に光りながらはらはらと涙が落ちた²⁶⁾。

ここでは、沙金は「あなたの為なら、妾誰を殺してもいい」と言い放ち、さらに「親も捨てゝゐるのぢやない？」と続けることで、血縁関係への執着を持たない姿勢を示すのに対し、次郎は「しかし、兄貴は一」と発することで、兄弟関係に強く拘泥し、躊躇する姿が描かれている。

しかし、2003 年の方洪慶訳においては、原文の核心的要素である「しかし、兄貴は一」の部分が全て削除されており、代わりに「那老大妈，怎么办呢？」（あの婆さんはどうするんだ？）という全く別の台詞が挿入され、その後の展開も原文とは異なる構成となっている。

方洪慶訳：「只要为了你，我杀谁都可以！」

“那老大妈，怎么办呢？”次郎说到

“一切到时候再说，事情发展到什么地步说什么话。”沙金似乎很坦然。

（引用者訳：「ただ君のためなら、誰を殺してもかまわない！」

「じゃあ、あの婆さんはどうするんだ？」次郎が言った。

「“すべてはその時になってから話すさ。事態がどこまで進むかによって

言うことも変わる。”沙金は平然としているようだった。)

このように、2003年の訳文では兄弟関係が完全に削除され、代わって挿入された台詞によって物語の焦点が変化している。次郎の内面的な葛藤、とりわけ兄への揺れる心理的衝突が描写されなくなり、物語の主題の一端が希薄になっている点は看過できない。これは単なる翻訳上の誤りというより、物語の核心的意義を損なう改変といえると考えられる。

これに対し、郷波訳を含んだ他の訳本はおおむね原文に忠実である²⁷⁾。例えば、

“为了你，我杀谁都可以”

这句话中有一种好似蛇蝎般刺人的东西。次郎再次感到一阵战栗。

“可是，哥哥他……”

“我不是连老妈都不要了吗？”

沙金说完，垂下视线。紧绷的脸上，表情忽然松弛下来，泪水在阳光中闪闪发光，扑簌簌落在炽热的沙子上。(引用者訳：「あなたのためなら、誰だって殺せる。」その言葉には、まるで蛇や蠍のように人を刺すものがあつた。次郎は再び戦慄を感じた。

「でも、兄さん、彼は……」

「俺は母さんさえもいらないうって言ったじゃないか？」

沙金はそう言い終えると、視線を下げた。張り詰めた顔の表情が突然緩み、涙が陽の光にきらめきながら、ぽたぽたと熱い砂の上に落ちていった。)

ここで注目すべきは、「しかし、兄貴は……」という原文の台詞が、「可是，哥哥他……」（でも、兄さん、彼は……）と訳されており、血縁関係を示す表現が忠実に再現されている点である。これに対して、2003年版の訳では、沙金の「妾は、親も捨てゝゐるのぢやない？」という台詞に該当する部分が

訳出されていないのに対し、鄒波訳では、「我不是连老妈都不要了吗？」（俺は母さんさえもいらないうって言ったじゃないか？）と訳されており、原文の流れを忠実に再現している。この台詞において沙金は、自ら母親との関係さえも断ち切ったことを明言しており、血縁に対する執着を完全に否定する彼女の姿勢がいっそう際立っている。

このように鄒波訳では、「母親さえもいない」という沙金の言葉によって、兄に強く執着する次郎の内面を鋭く揺さぶり、その価値観を相対化しようとする彼女の意図が、より鮮やかに浮かび上がっているのであると考えられる。

しかし最終的には、沙金の策略は兄弟関係を崩すことには至らず、物語の終盤において彼女自身が兄弟の手によって命を奪われる。阿濃の目撃談によれば、

その夜、阿濃は、夜更けて、ふと眼をさますと太郎次郎と云う兄弟のものと、沙金とが、何か声高かに争つてゐる。どうしたのかと思つてゐる中に、次郎が、いきなり太刀をぬいて、沙金を斬つた。沙金は助けを呼びながら、逃げやうとすると、今度は太郎が、刃を加へたらしい。それからしばらくは、唯、二人罵る声と、沙金の苦しむ声とがずっといたが、やがて女の息がとまると、兄弟は急に抱きあつて、長い間黙つて、泣いてゐた²⁸⁾。

とその焦点が沙金自身ではなく、兄弟関係の再接続に据えられている。このような物語上の配置について、従来の「偷盗」論において、平岡（1982）は、作者が「沙金の心理の内側に踏み込むことはない」²⁹⁾として、彼女の謎めいた性質に注意を促している。確かに、主要登場人物の中で語りが焦点化されないまま終わるのは沙金だけである。

特筆すべきは、このクライマックスにあたる沙金の死の場面において、鄒波訳を含む諸訳が、原文の意味を比較的忠実に踏襲しているという事実であ

る。例えば、鄒波訳では以下のように訳されている。

鄒波訳：那天晚上，阿浓在半夜醒来，听见太郎，次郎兄弟俩和沙金高声争吵着什么。阿浓刚想这是怎么了，次郎忽然拔出长刀劈向沙金。沙金连呼救命，想要逃跑。接着，太郎也拔刀相向。此后，俩兄弟的咒骂声，沙金痛苦的呻吟持续了片刻。不久，女人停止了呼吸，兄弟俩忽然拥在一起，长久地默默哭泣。（引用者訳：その夜、阿濃は真夜中に目を覚まし、太郎と次郎の兄弟が沙金と何かを大声で言い争っているのを聞いた。阿濃が一体何があったのだろうと思ったそのとき、次郎が突然刀を抜いて沙金に斬りかかった。沙金は「助けて！」と叫びながら逃げようとした。続いて、太郎も刀を抜いて襲いかかる。その後もしばらく、兄弟の罵声と沙金の苦しげなうめき声が続いた。やがて、女は息を引き取った。すると兄弟は突然抱き合い、長い間、黙って涙を流した。）

訳者も沙金の死を、原文における「排除された女性」としての終局的な運命として忠実に描写している。「偷盜」における、男性たちの和解と女性の排除という物語構造は、鄒波による現代訳においても可視化されており、男性間の連帯と女性の死という結末が、読者に対して強く印象づけられている。

五 まとめ

以上の考察を通じて、本稿では芥川龍之介「偷盜」の中国語訳を手がかりに、同作品が時代を経て中国文化圏においてどのように読まれてきたかを通時的に明らかにした。とりわけ、作品における男性中心のジェンダー構造に伴う排除された女性という沙金の人物像が、中国語を通じていかに再構成されてきたかを分析した。

その結果、兄弟関係を軸に展開する物語構造において、次郎の内的葛藤や太郎との和解、そして沙金の排除が、鄒訳では原文の文脈を踏まえつつ忠実

に翻訳しようという志向がうかがわれ、男性的な連帯の再生と女性性の犠牲という主題がより明確に読者に提示されていることが明らかとなった。

一方で、鄒訳以前の諸訳、とりわけ 2003 年の訳においては、原作が描く兄弟関係の核心性といった重要な要素が、表現の削除・改変によって十分に表現されていない傾向がある。こうした傾向は、当時の翻訳が学術研究や精読を前提としたものではなく、むしろ社会背景と関わっていたためである。つまり、訳者は当時の読者の関心に応じて、心理の複雑さよりも人物像の行動の明確化を優先したと考えられる。

芥川作品はこれまで中国で幾度となく翻訳・出版されてきたが、鄒波訳は翻訳に際して、「研究型翻訳」の方法論を導入し、編纂と考証を通じて注釈上の不足を補いながら、原作の背景や文脈を深く理解し、現代中国社会の要請に応じて原作を再構築し、作品に新たな命を吹き込もうとする実践であったと言える。鄒訳は、現代中国における海外文学翻訳の特徴を体現する事例であり、翻訳者が媒介者として読者や社会と対峙し、翻訳を通じて原作に新たな意味を生成しようとする営為として位置づけられるだろう。

[注・参考文献]

- 1) 「羅生門」の発展的ヴァリエーションとした議論は、海老井英次「『偷盗』への視覚」『語文研究』2号、1971年10月、越智治雄「作品論 偷盗」『国文学：解釈と教材の研究』17(16)、1972年12月、三好行雄「下人のゆくえ－『偷盗』の試み・その一つ」『日本文学』22(7)、1973年、7月を参考したのである。
- 2) 友田悦生「『偷盗』の挫折と真理—沙金と阿濃の場所—」(『日本近代文学』第56集、1997年5月)
- 3) 中村清治「偷盗」における男性性の機制—疑う男たちの物語—」『日本文藝研究』51(1)、1999年6月、57-74頁。
- 4) 同注3。
- 5) 井汲清治「偷盗」『三田文学』、1917年8月
- 6) 海老井英次「＜我執＞から＜救済＞へのロマン」『近代文学考』2号、1974年3月
- 7) 三好行雄「『羅生門』から続く下人の行方としての『救済の試み』」(『芥川龍之介論』所収、筑摩書房、1984年5月)

- 8) 下坂恵「『偷盜』試論」『方位』(10)、1986年12月
- 9) 酒井英行「『偷盜』の虚実」『人文論集』(42)、1992年1月、157-170頁
- 10) 奥野政元『芥川龍之介論』翰林書房、1993年
- 11) 平岡敏夫『芥川龍之介:抒情の美学』大修館書店、1982年11月
- 12) 周倩「芥川龍之介の『偷盜』論」上海外国語大学、修士論文(日本語)、2010年
楊菲は「芥川龍之介の描いた『他者』—『偷盜』における女性像につて—」広東外語
外貿大学、修士論文(日本語)、2014年
- 13) 宋陽「論『偷盜』中“女性不信”的表現機制」『ANHUIWENXUE』6期、2015年
- 14) 夏丐尊訳・魯迅訳・方光燾訳・章克標訳『芥川龍之介集』開明書店、1927年
「羅生門」、「鼻」、「袈裟と盛遠」、「手巾」、「藪の中」、「湖南の扇子」、「南京の基督」、
「支那遊記」、「或旧友へ送る手記」の訳文が収録されている。
- 15) 黄来順「偷盜」(葉渭渠編『芥川龍之介作品集・小説卷』所収、中国世界語出版社、
1998年8月)
聶双武『芥川龍之介短篇小説』湖南文芸出版社、1998年12月
方洪慶『羅生門』中国政公出版社、2003年4月
鄭民欽「偷盜」『芥川龍之介全集』山東文芸出版社、2005年3月
聶中華・曾文彤『日本名家作品選読・芥川龍之介』四川大学出版社、2007年1月
焼野『絲女紀事』現代出版社、2022年7月
鄭世鳳『羅生門』現代出版社、2022年7月
王星星『地獄変』北京聯合出版公司、2023年2月
丁朱蕾『煙草和惡魔』重慶出版社、2023年6月
鄒波『羅生門：故事新編』廣西師範大学出版社、2024年5月
- 16) 鄒波：復旦大学日本文学系の教員、日本近代文学、日中比較文学の研究者である。
また、訳者は、『羅生門：故事新編』、『侏儒の話：士説新語』、『白蘭花：中国奇遇
記』という三つの単行本から成る『芥川文集』を刊行されたのである。
- 17) 鄒波「訳後記」『羅生門：故事新編』廣西師範大学出版社、2024年5月、474頁
また、鄒波「研究型翻訳の試み—芥川龍之介の中国旅行記の考証を兼ねて—」(『芥
川龍之介研究』2022年)を参考したのである。
- 18) 原文：本文探讨翻译实践中的两个问题：如何编选与考证。即如何通过“研究性翻
译”在变选中体现译者对于芥川文学的理解，使作品通过编选体现出新意。同时在
吸收前人研究成果的基础上，利用数据库，电子资源等对一些有待考证的专有名词
进行确认，弥补筑摩书房与岩波书店新版全集注释中存在的不足。
- 19) 原文：以题材为主线编选相关作品，力图构建整体性的阅读体验。其次，不机械，
被动地翻译，以“忠实理解”，“忠实表现”为目的，在翻译的过程中反复考证深入理
解原文的信息与相关背景。
- 20) ジェイ・ルービン編 村上春樹序、畔柳和代訳『芥川龍之介短編集』新潮社、2007年

- 21) 村上春樹「芥川龍之介—ある知的エリートの滅び」、畔柳和代訳『芥川龍之介短編集』新潮社、2007年

22) 同注3

- 23) 『芥川龍之介全集』（第一巻）、岩波書店、1995年11月によるものである。138頁

24) 前掲書、150頁

- 25) 王星星訳（2023）：无论怎么个死法，只要是死于他手，我就了无遗憾。（引用者訳：どんな死に方をしようとも、彼の手によって死ぬのなら、私は何の未練もない。）
丁朱蕾訳（2023）：他如何杀我，我都无所谓。（引用者訳：彼がどのように私を殺そうと、私はどうでもいい。）

鄭世鳳（2022）：只要是死在哥哥手上，自己都是心甘情愿的。（引用者訳：兄の手にかかって死ぬのなら、私は心からそれを受け入れる。）

焼野（2022）：如果能死在哥哥手里，也是死得其所。（引用者訳：兄の手にかかって死ぬのなら、それもまた本望だ。）

鄭民欽（2005）：哥哥如何处死我，我都心甘情愿。（引用者訳：兄がどのように私を処刑しようとも、私は心から受け入れる。）

方洪慶（2003）：即使我死在哥哥的手下也心甘情愿。（引用者訳：たとえ兄の手にかかって死ぬことになっても、私は心甘んじて受け入れる。）

黃来順訳（1998）：只要是由哥哥的手处死我，就了却我的愿望。（引用者訳：ただ兄の手で私が処刑されさえすれば、私の願いは果たされる。）

- 26) 同注23、157－158頁

- 27) 王星星訳（2023）：“为了你，谁都可以杀。”

沙金的话似带着蝎子的毒刺，次郎又一次产生战栗的感觉。

“可哥哥他——”

“我不也舍弃了自己的父母吗？”

沙金说完垂下眼帘，紧绷的神色迅速和缓下来。她在太阳下闪着光，眼泪扑簌簌地落在晒得发烫的沙地上。（引用者訳：「あなたのためなら、誰だって殺せる。」）

沙金の言葉はまるで蠍の毒針のようで、次郎は再び戦慄を覚えた。

「でも、お兄ちゃんは——」

「私だって、自分の両親を捨てたじゃない。」

沙金は目を伏せ、張りつめていた表情はたちまち和らいだ。彼女は太陽の下で光を放ち、涙がはらはらと、焼けつくように熱い砂地の上へと落ちていった。）

丁朱蕾訳（2023）：“为了你，我什么人都能杀。”

这话如同蝎子扎心，次郎再次感到不寒而栗。

“但是，我哥哥……”

“我不是连亲妈都不要了吗？”

沙金说着，眼皮低垂，绷紧的脸庞突然松弛，滚滚热泪滴在热日照耀下的灼热沙子

上面。(引用者訳:「あなたのためなら、誰だって殺せる。」)

その言葉はまるで蠍が心を刺すかのように、次郎は再び身の毛がよだつを感じた。

「でも、僕の兄は……」

「私は実の母親さえ捨てたじゃない。」

沙金は言いながら、まぶたを伏せ、張りつめていた顔つきはふっと緩んだ。熱い日差しに照らされた灼熱の砂の上に、熱い涙が次々と滴り落ちた。)

鄭世鳳(2022):“为了你，我杀谁都行。”

这语气中含有像蛇蝎一样扎人的东西。次郎再次感觉到浑身战栗。

“但是，哥哥……”

“我又何尝不是连父母都舍弃了？”

沙金这样说着，低下了头，脸上紧绷的表情突然松弛下来，泪水扑簌簌地往地上直落。(引用者訳:「あなたのためなら、誰を殺してもかまわない。」)

その口調には、蛇や蠍のように人を刺すものが含まれていて、次郎は再び全身が震えるのを感じた。

「でも、兄ちゃんは……」

「私だって、両親を捨てたじゃないか？」

そう言いながら、沙金はうつむき、顔に張りつめていた表情は突然緩み、涙がはらはらと地面へ落ちていった。)

焼野(2022):“如果是为了你，我可以杀死任何人哦。”

女人的话语带着如同毒蝎的刺，能深深地蛰进人的皮肉里。次郎在度感到一阵战栗。

“但是，哥哥他——”

“我不是也连父母都舍弃了吗？”

话音刚落，沙金的眼睛忽然垂了下来，那张徒然严峻的面孔终于松弛下来，大颗大颗的泪水在日光下闪闪发亮，不断滚落在滚烫的沙地上。(引用者訳:「あなたのためなら、誰でも殺してあげるよ。」)

女の言葉には毒蠍の針のようなものが含まれていて、人の皮膚の奥深くまで突き刺さるかのようだった。次郎は再び戦慄を覚えた。

「でも、兄ちゃんは——」

「私だって、両親を捨てたじゃないか？」

そう言い終えると同時に、沙金の視線はふっと下に落ち、ただ無意味に張りつめていたその厳しい表情はようやく緩んだ。大粒の涙が日光を受けてきらきらと輝きながら、焼けつくように熱い砂地の上へと次々に転がり落ちていった。)

聶中華・曾文彤(2007):“为了你，我谁都可以杀。”

次郎的心像被蛇蝎蛰了一下，全身颤抖。

“不过，哥哥——”

“我不是也抛弃了亲人吗？”

沙金垂下双眼，绷紧的脸松弛了下来，眼泪沙沙地在被太阳烤得炙热的沙粒上。(引用者訳：「あなたのためなら、誰だって殺せる。」)

次郎の心は蛇や蠍に刺されたかのように、全身が震えた。

「でも、兄さん——」

「私だって、身内を捨てたじゃない。」

沙金は目を伏せ、張りつめていた顔は緩んだ。涙がさらさらと、太陽に焼かれて熱くなった砂粒の上に落ちていった。)

鄭民欽(2005)：“为了你，我谁都敢杀。”

她的话如蝎了般刺心，次郎又一次感到浑身战栗。

“可是，那是哥哥……”

“我不是连老母亲都不要了吗？”

沙金说完，低下眼睛，紧张严峻的面部表情突然松他下来，泪水簌簌滴落在烈日照耀闪亮的灼热沙子上。(引用者訳：「あなたのためなら、誰だって殺す覚悟がある。」) 彼女の言葉はまるで蠍に刺されたかのように胸を突き、次郎はまたしても全身に戦慄が走るのを感じた。

「でも、それは兄さんで……」

「私だって、老いた母親さえ捨てたじゃない。」

そう言い終えると、沙金は目を伏せ、緊張して厳しかった表情はふいに緩んだ。涙がぼろぼろと、烈日の下で光を放つ灼熱の砂の上に滴り落ちていった。)

聶雙武(1998)：“为了你，我谁都可以杀”

次郎的心像被蛇蝎蛰了一下，全身颤抖。

“不过，哥哥——”

“我不是也抛弃了亲人吗？”

沙金垂下双眼，绷紧的脸松弛了下来，眼泪沙沙地在被太阳烤得炙热的沙粒上。(引用者訳：「あなたのためなら、誰だって殺せる。」)

次郎の心は蛇や蠍に刺されたかのように、全身が震えた。

「でも、兄さん——」

「私だって、身内を捨てたじゃない。」

沙金は目を伏せ、張りつめていた顔は緩んだ。涙がさらさらと、太陽に焼かれて熱くなった砂粒の上に落ちていった。)

黄来順訳(1998)：“只要是为了你，我杀谁都可以！”

在她的话语中有着蝎子一般的蜇人的东西。次郎再一次感到了一种战栗。

“可是，哥哥他——”

“我，不是也把父母都抛弃了吗？”

沙金这样地说着，低下眼睛，突然紧张的面部表情松弛下来，在阳光的照射下泪珠哗啦哗啦地落在了滚烫的沙地上。(引用者訳：「あなたのためなら、誰を殺すこと

だってできる！」彼女の言葉には、まるで蠍の毒針のように人を刺すものがあった。次郎は再び、身震いするような戦慄を覚えた。

「でも、兄さんは——」

「私は、両親さえ捨てたじゃない。」

沙金はそう言って目を伏せた。張りつめていた顔の表情がふっと緩み、陽光の下、涙の粒がざあざあと音を立てるように、焼けつくほど熱い砂地の上へと落ちていた。）

28) 同注23、206頁

29) 同注11

[付記]

* 芥川龍之介作品は、全て岩波書店版『芥川龍之介全集 第六巻』(1996)より引用した。引用文中の□は著者によるものである。原文の引用に対する中国語訳は、すべて原文のまま入力した。それ以外の中国語の著者名、著書、出版社の表記は日本語と合わせた形で統一している。また、引用の中国語訳に対して、著者自身が再翻訳を行った。

[謝辞]

本稿は、2025年1月31日に大阪大学にて開催された大阪大学比較文学会シンポジウムにおける口頭発表を基に加筆・修正を加えたものである。ご教示を賜りました中直一先生に、ここに深く感謝の意を表します。

(大学院博士後期課程学生)

SUMMARY

The Translation of Ryūnosuke Akutagawa's *Chuto*
in Contemporary China:

The Erased Character of Shakin

Shuhua HAN

Ryūnosuke Akutagawa's *Chuto* (1917) has long been regarded as a “failed work” and has had limited influence within the Japanese literary world. In recent years, however, the piece has seen renewed interest and reevaluation in China. This paper focuses on the translation and reception of *Chuto* in contemporary Chinese contexts, with particular attention to the “exclusion” of the female character Shakin during the translation process. Through a comparative analysis of the 2024 “research-oriented translation” by ZouBo and earlier Chinese translations, this study demonstrates that Zou's version faithfully reconstructs the original's structure of male homosocial solidarity and its systematic exclusion of women, clearly articulating the causal relationship between the reconciliation of the brothers Tarō and Jirō and the sacrifice of Shakin.

In contrast, many earlier translations tend to dilute or alter key narrative elements, thereby obscuring the gendered power dynamics inherent in the original text. Zou's translation exemplifies the current trends in Chinese translation of foreign literature, wherein the translator acts as an active mediator, responding to sociocultural demands and generating new meanings through the translation process itself.